

(感想)「精神疾患の怖いイメージが無くなった。」「病気の大変さが良く分かった」
「幻聴があっても頑張ってやれる」などイメージの変化が多かった。

(問題点、意見)

学校の先生の精神障害に対する理解不足の問題がある。生徒がせっかくよい体験をして精神障害についてのイメージが変化しても、学校の先生が偏見を持っていたりすれば、体験が無駄になってしまう。

学校の先生への精神障害者教育が必要。

学生を受け入れる施設側の意識も変わらないと正しい理解が伝わらない。スタッフが中学生に話しても無理だとか、当事者自身が見られる抵抗感を持っていたりすると受け入れられない。

広島県内の先進地視察調査

広島県内で調査し得た範囲において、精神障害者との交流を先進的に行っている3カ所について報告する。

まず一つの作業所では、当事者のほとんどが総合失調症患者であった。人数や期間は不定期ながら、地元の高校から希望する学生が現場に訪れ、自動車部品の組み立てや種々の下請け作業を見学したり、当事者と話し合うなどして交流を図っていた。施設側の注意点としては、当事者と触れ合う前に病気を持っていることの大変さや生活のしづらさを学生に十分説明し、当事者の心が傷付かないよう配慮しているとのことであった。成果として、学生の感想に、交流前は「話がかみ合わないのではないか」「ただ体調を崩した人」「よく分からない」等自分とは異質なものという意見が多かったが、交流後は「考えていたのと違っていた」「特別な人じゃない」「そこら辺の人と変わらない」「そこまで考えたこともなかった」等、精神障害者に対する誤解や偏見が少なくなり、また精神障害自体を初めて考える機会となったという意見が多数を占めていた。

別の作業所では、総合失調症患者と知的障害者で構成され、タオルの箱詰めやクッキー、縫製品の制作販売を行っていた。数年前より地元高校看護科から看護学生が週1回1ヶ月程度訪れ、当事者と共同で作業したり、話し合ったりしていた。学校での授業である程度精神障害に対する知識はあるものの、施設側としては当事者が傷付いて病状が悪化しないように、前もって当事者個々の特徴や接する上での注意点を説明し、当事者を十分把握してもらうよう努めていた。また地元中学生が職場体験の一環として、人数期間とも不定期ながら同施設を訪れ、作業の見学を主に行っていた。こちらは、精神障害に対する知識をほとんどもっていないので、当事者に影響を与えないようやはり前もって十分説明をしているとのことであった。交流前後の感想として、前述の施設と同様精神障害に対する再認識の場になったという意見が多くみられたとのことであった。

最後にある精神科病院ではまず季節的なイベントの開催による触れ合いとして地域住民に呼び掛けて、院内農園で採れた野菜、クッキーなどのお菓子などを収穫祭（院内バザー）で販売したり、付属する地域生活支援センターで、患者の家族、地域住民を対象に定期的に将棋大会、カラオケ、ビデオ鑑賞会を開き、調理教室・栄養指導を行っていた。また花祭り大会で地域の高等学校のブラスバンド部の演奏が行われ、また病気についてのパネル展示などを実施していた。注意点として主催者側は体験交流においてはまず当事者が傷付かないような配慮に神経を使っていたし、パネル展示内容は知識が一人歩きしないように偏見を助長しないように十分な配慮をしていた。交流体験は季節毎のイベントとして行っているが、成果としては毎年楽しみにしている地域住民がある一方で、あまり参加者が広がらないという問題点があった。地域住民を対象にした普及啓発として、年に一回地域生活センターにおいて社会福祉協議会と連携をとり、医師、看護師、ソーシャルワーカーや民生委員を講師として一般住民の希望者を対象にしたボラ

ンティア養成講座を企画していた。その講義内容には対象が一般住民であるだけに偏見を助長しないように注意が払われていたが、知識を説明することに重きが置かれ、当事者の生活上の問題の理解にまで至らないようであった。